

国立国語研究所学術情報リポジトリ  
国語研の窓 第9号 (2001年10月1日発行)

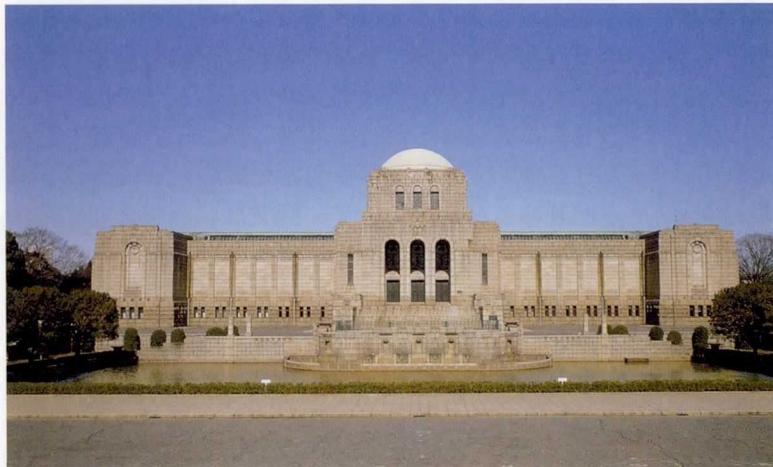
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001952">https://doi.org/10.15084/00001952</a>

# 国語研の窓

9号

平成13年10月1日 第9号 発行 独立行政法人国立国語研究所  
Independent Administrative Institution :The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所広報委員会  
〒115-8620東京都北区西が丘3-9-14  
電話 03-3900-3111 FAX 03-3906-3530  
URL <http://www.kokken.go.jp/>



創立当初～昭和29年9月：明治神宮聖徳記念絵画館の一部を借用  
6ページ「表紙のことば」参照（写真 明治神宮聖徳記念絵画館所蔵）

## 暮らしに 生きることば

### 「ありがとう」と「すみません」

駅のホームで近くの人に「切符、落としましたよ」と教えてもらったら、なんと言うでしょうか。「ありがとうございます」というか。「すみません」というか。私たちは、お礼を言う時にも「すみません」とよく言います。

日本語を学ぶ外国の人たちは、「なぜ日本語ではお礼の時に謝ることばを言うのか」と不思議に思うようです。逆に日本人が英語でお礼を言おうとして、つい日本語の癖で I'm sorry と言って変に思われたりすることもあります。

でも、いつでも「ありがとう」の代わりに「すみません」が使えるわけではありません。たとえば、「がんばって」とか「おめでとう」と言ってもらった時には、「ありがとう」は言えても「すみません」は変ですね。それは、「すみません」が自分のために何かをしてくれたことで相手にかけた負担（手間、

お金、時間など）を気遣う心を表したものだからではないでしょうか。励ましや祝福のことばをかけること自体は特に負担を伴うものではないので、相手の厚意に対する自分の喜びや感謝を表す「ありがとう」がふさわしい、と考えられます。

以前、〈会社で来客と会話中に同僚がお茶を出してくれたら何と言いますか〉という調査をしたことがあります。その回答の中に、「出してくれた人が後輩や親しい人なら『ありがとう』、目上や先輩なら『すみません』」というものが複数ありました。どうやら、丁寧に言う時には「すみません」を使う、ということのようです。一般に日本のコミュニケーションでは、丁寧にする際には自分のことよりも相手への心配りを優先的に示すことが多いのですが、「すみません」もその一例と言えるでしょう。

時々耳にする「すみません、ありがとうございます」と二つ並ぶ言い方は、相手への気遣いと、ありがたいという思いの、両方ともを表したいからかもしれませんね。

（熊谷智子）

# 社会言語学的調査に携わって

国立国語研究所では創立以来多くの社会言語学的調査研究を行ってきました。北海道における共通語化の調査、山形県鶴岡市における共通語化の調査、愛知県岡崎市における敬語の調査、大都市における言語生活の実態調査、そして最近行われた日本語観国際センサスなどがその代表的なものといえます。

社会言語学は、研究対象とすることばの側面によって、ミクロな社会言語学（微視的社会言語学）とマクロな社会言語学（巨視的社会言語学）とに分けることが出来ます。冒頭の例で言えば、共通語化、敬語、言語生活などはミクロな社会言語学が対象とする研究分野であり、個々の言語内の問題を社会的変数（性、年齢、学歴など）との関係で明らかにしようとする研究分野です。日本語観国際センサスで取り扱った言語イメージの比較はマクロな社会言語学に属するものといえます。マクロな社会言語学は、多言語社会における言語問題、言語政策、バイリンガルの問題などを研究対象とするものです。

ソシュール（20世紀初頭）以来、言語学はラングを扱う学問とされてきました。ラング（langue）とは同一言語を話す社会の成員が共有する言語体系のことです。しかし社会言語学では個人の言語意識に一歩踏み込んで、パロール（parole）、つまり各個人の持っている言語観や言語使用の意識を研究の対象とします。

個人の言語観を研究対象とすることが多いため、安定した結果を得ようとする、どうしても多くの個人からの情報を必要とします。そのためひとつの地域社会で社会言語学的調査を実施する場合、何百、あるいは千人にも及ぶ被調査者の協力が必要となるわけです。

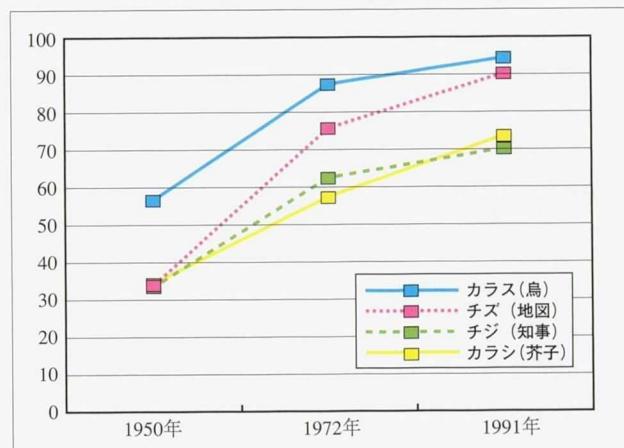
分析に際しては、言語学で得られた知見だけでなく、社会学や統計学で得られた知見を分析の手がかりとすることが一般です。

国語研究所が行った社会言語学的調査の一例として、鶴岡市における共通語化の調査を見てみましょう。この調査は、山形県鶴岡市という地域社会で方言がどの程度共通語化しているか、また方言と共通語の使い分けがどのように行われているのかを時代を隔てて調査したもので、1950年、1972年、1991年の3回にわたり調査が行われてきました。調査項目

は音声、アクセント、語彙、言語意識などが中心で、被調査者として15歳から69歳の男女がランダムサンプリングによって選ばれました。1991年調査では405名の被調査者から回答を得ることが出来ました（回収率81%）。

図1は音声に関する調査項目から、中舌化と呼ばれる現象を4つのことばで観察した結果を示したものです。中舌化とは共通語の「イ」の発音が「ウ」の発音に近くなったり、「ウ」が「イ」に近くなったりして、「イ」と「ウ」の中間的な音で発音される現象のことを言います。図では共通語と同じ発音で回答した人の割合を、各調査ごとに線で結んで示してあります。図を見ると、共通語化の程度が進んでいることがはっきりと現れていますが、「カラス」のように共通語で「ウ」と発音されることばの方が、

図1 共通語の発音で回答した人の割合



「カラシ」のように「イ」と発音されることばよりも割合が高くなっていることもわかります。一方、以前鶴岡方言で「クアヨウビ（火曜日）」と発音されていたことばなどは、ほぼ全員共通語と同じ「カヨウビ」という発音で回答されていました。図に示したように、「チジ（知事）」のように共通語での回答率が低いものもありました。単語によって（発音の）共通語化の進展具合が微妙に異なることがおわかりいただけだと思います。

さてこのようにしてみると、いずれ共通語化が進んで方言は私たちの回りからなくなってしまうような気がしてきます。本当にそうでしょうか。そのことを考える手がかりとして、別の調査項目を見てみ

ましょう。

図2は場面による方言と共通語の使い分け意識を調べたものです。家族のような親しい間柄と見知らぬ旅人を相手にして話す場合では、ずいぶん様子が違っているのがわかると思います（調査では4つの場面について尋ねましたが、ここでは2場面を示すのにとどめました）。つまり見知らぬ人には共通語を使う人が多くなったけれど、家庭内では共通語と方言を混在させて使う人が多いということです。

2つの図に示された結果からこんなことが言えな

図2(1) 場面によることばの使い分け (1991年)

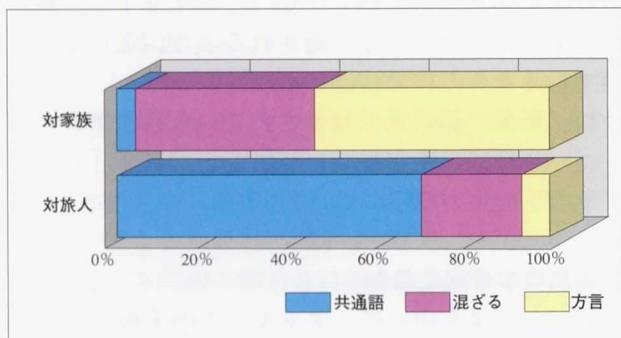


図2(2) 場面によることばの使い分け (1972年)

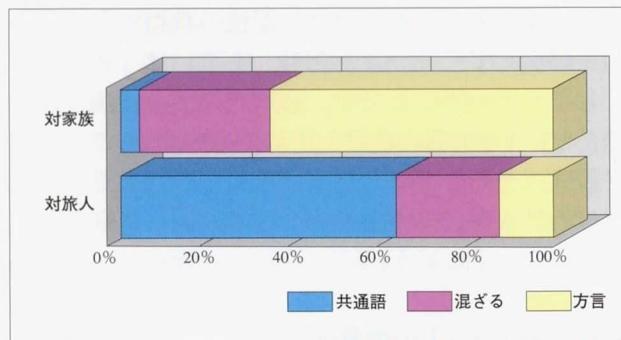
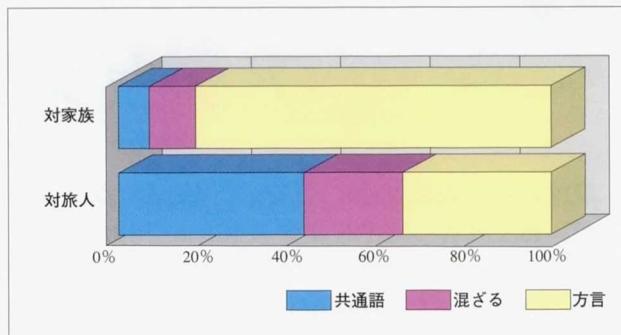


図2(3) 場面によることばの使い分け (1950年)



いでしょうか。共通語化が進む一方で、方言使用の能力を併せ持っている人が数多く存在している。そして、その人たちは場面によって方言と共通語を使い分けている。つまり、地域社会から方言がなくなるのではなく、方言と共通語が共存していくことになるのではないかでしょうか。

上記鶴岡調査のように、国語研究所ではこれまでミクロな社会言語学を研究対象としてきました。しかし、日本は今、種々の側面で国際化の波に洗われています。当然、ことばの問題も例外ではありません。つい最近も、英語公用語論なる議論がマスコミを賑わしていましたが、方言・共通語という言語内の要因に、さらには英語をはじめとする外国語の要因が加わり、地域社会では今後言語接触を含めた複雑な言語生活が展開されることになるのかも知れません。最近、国語研究所では日本語観国際センサスを実施しました（概略は、「国語研の窓」2号～4号を参照）。この調査のようにマクロな視点に立った社会言語学的調査の重要性も今後は高まっていくことが予想されます。

（米田正人）

## 開催案内

- 1 国立国語研究所 第9回 国際シンポジウム 第1部会  
「多言語・多文化共生社会における言語問題」  
2001年10月22日(月) 10:00～17:00  
国立国語研究所講堂  
参加申し込み・問い合わせ先 事務局:早田美智子  
E-mail mihayata@kokken.go.jp

- 2 平成13年度国立国語研究所日本語教育短期研修  
「対照研究と日本語教育」  
2001年11月24日(土) 神戸大学(予定)  
2001年12月1日(土) 国立国語研究所  
「コンピュータと作文添削」(仮題)  
2002年1月12日(土) 午後(予定)  
国立国語研究所  
問い合わせ先 研修事務室:tel 03-5993-7667

## 開催記録

- 1 平成13年度国立国語研究所日本語教育短期研修  
「多言語環境にある子供の言語能力の評価」  
7月7日(土) 国立国語研究所講堂

- 「日本語教材と著作権」  
8月23日(木) 国立国語研究所講堂

# アクセントの平板化

最近、若い人を中心に「彼氏」「美人」などの言葉が、昔とは違って平らなアクセントで発音される傾向が見られます。これはどういうことなのでしょうか。アクセントとは何かということも含めて、順に見ていくことにしましょう。

## 日本語のアクセントとは

「雨」と「飴」はどちらも「アメ」と読む同音異義語ですが、実際に声に出して読んでみると、声の高さにはっきりと違いが出ます。NHKのアナウンサーなら、「雨」は「ア」が高く「メ」が低い、反対に「飴」は「ア」が低く「メ」が高い、ということになるでしょう。このように、声の高さの高低として捉えられるのが、日本語のアクセントの特徴です。

とはいえ、アクセントには地域差がありますので、ここではNHKのアナウンサーが話すような標準的なアクセントをとりあげることにします。

## 声の高さの下がり目がポイント

それでは、「ア」や「メ」のように仮名一字で表される音の一つひとつについて、ここは高い、ここは低いと決っていることがアクセントなのでしょうか。

実は、そうではありません。言葉として大事なのは、むしろ声の高さが高から低へと変化する下がり目の方なのです。個々の単語にこのような下がり目があるのかないのか、あるとすればどの位置にあるのか、ということがアクセントとしては重要です。アクセント研究の世界では、下がり目のあるものを起伏式アクセント、下がり目のないものを平板式アクセントと呼んで区別しています。

## 平板式アクセントの見分け方

例えば、「イノチ(命)」は高低低、「ココロ(心)」は低高低のように、高から低への下がり目がありますから、アクセントはどちらも起伏式です。これに對して、「オトコ(男)」「サクラ(桜)」は低高高で下がり目がありませんから、両方とも平板式と言いたいところですが、これらに助詞の「が」を付けてみてください。「オトコガ」は低高高低、「サクラガ」は低高高高となって、明らかな違いが現れます。

「オトコ」は語末の「コ」の後に下がり目がありますので、実際は起伏式だったわけです。結局、助

詞を付けても最後まで下がり目の現れない「サクラ」だけが平板式ということになります。

## アクセントの平板化とは

「トショカン(図書館)」のアクセントを例にとりましょう。この語はもともと「ショ」の後に下がり目のある起伏式アクセントだったはずですが、最近では平板式の発音も多く聞かれるようになりました。読者のみなさんの発音はいかがでしょうか。このように、従来、起伏式で発音されていた語のアクセントが、平板式に変化していく現象を指して「アクセントの平板化」と呼んでいます。

## 平板化はなぜ起こるか

東京の言葉を中心に、アクセントの平板化は大きな流れとなって進行しています。それでは、このような変化はなぜ起こるのでしょうか。難しい問題ですが、まず考えられるのは、記憶の負担や発音の労力を軽減して、「コスト削減」あるいは「省エネ」で行こうということです。起伏式の場合、個々の単語ごとに下がり目の位置を覚えなければなりませんが、平板式はその必要がありません。また、下がり目が無ければ、発音の労力もその分だけ減って楽になるということでしょう。

## 平板化アクセントの印象は

ところで、「サーファー」「モデル」「バイク」「ビデオ」といった外来語のアクセントの平板化については、「専門家アクセント」という面白い指摘があります。平板化がいち早く起ころのが、その単語を普段からよく使う人たちの間であり、ある種の単語のアクセントを平板化することが、その分野によく通じていることの目印になるというのです。また、例えば「バイク」を平板式で発音する人たちの間には、仲間意識が育つことにもなるといいます。

起伏式アクセントは、平板式に比べて確かに際立って聞こえます。それを平板化して滑らかに発音すれば、どこか特別扱いを解除したような気分になるでしょう。ある種の単語を発音の面でも自明のようにさらりと扱うことが、自分が専門家であるとアピールすることにつながる、そんな意識が働いているのかもしれません。

(相澤正夫)

# 海外向け日本語情報発信システム

## 1. 日本語ホームページの問題点

海外のパソコンから日本語のホームページにアクセスすると、どのように見えるのでしょうか。普通は、日本語の文字の部分が意味不明の記号などに置き換えられて表示され、まったく読めない状態になっていると思います。

海外のパソコンで日本語のホームページを読むには、日本語を表示するための特別な機能をあらかじめセットしておく必要があります。しかし、ある程度の手間がかかるので、パソコンやインターネット閲覧ソフトに関する技術的な知識に自信がない人は、二の足を踏んで、結果的にあきらめてしまう場合が多いのではないかと思われます。

このような問題の解消を目指す研究の例を紹介しましょう。

## 2. 日本語データベースの検索ホームページ

### <基本的なアイデア>

世界中のインターネット閲覧ソフトで日本語を確実に表示できるようにするには、どうすればよいのでしょうか。現在いくつかの方法が開発されていますが、国立国語研究所が中心になって開発しているシステムは、日本語の一つ一つの文字を「画像（イメージ）」で画面にすばやく表示できるよう工夫をこらしています。

### <具体例その1>

この方法を最初に利用した例は、「日本語の語彙データベース（注1）」を海外から検索できるホームページで、平成13年春に国立国語研究所から公開されました。準備した文字画像は、日本の漢字に加えて中国の簡体字・繁体字、甲骨文字、梵字など9万種以上あり、研究所の外に設置された専用サーバーから高速で配信するようになっています。

検索ホームページの使い方は、以下のとおりです。国立国語研究所のホームページ（注2）にアクセスすると、図1に示す入力画面が表示されます。入力エリアに検索したい言葉のローマ字表記を入力して<Find>のボタンをクリックすると、図2に示すような検索結果が表示されます。これは「いし」という読みの語が昭和30年代に出版された雑誌90種類に何回出現したかを検索した例で、Written form（表記）は日本語表示、Origin（語種）やPart of Speech

（品詞）などの情報は英語で表示されるようになっています。

### <具体例その2>

たとえば、本のタイトル（書名）などを英訳すると、本来のニュアンスがどうしても伝わりにくくなります。海外から我が国の出版情報を検索する場合、少なくとも書名や著者名は日本語で表示されるのが望ましいと考えられます。

そこで、国立国語研究所は、我が国の出版情報データベースを海外からも日本語で高速に検索できるシステムの研究に取り組んでいるところです。（データベースの中身は、社団法人・日本書籍出版協会が作成しているもので、現在入手可能な書籍約60万件の書誌情報が収められています。）

このような研究は、海外の日本語学習者にインターネットで日本語教材を提供する際にも役に立つのではないかと期待されています。

（注1）『現代雑誌九十種の用語用字：全語彙・表記』、国立国語研究所、1996、三省堂

（注2）[http://www.kokken.go.jp/public/zassi90syu\\_e.htm](http://www.kokken.go.jp/public/zassi90syu_e.htm)

Complete Vocabulary from a Survey of Ninety Contemporary Japanese Magazines

Enter word to search for:

図1 入力画面の例

いし			
Written form	Form count	Total count	Origin / Part of Speech
石	28	28	Native noun
意志	28	40	Sino noun
意思	12		
遺志	1	1	Sino noun
医師	33	33	Sino noun
縊死	1	1	Sino noun

図2 検索結果の例

（横山詔一）

「国語研の窓」8号ではアンケートに御協力くださいありがとうございました。今後の編集・配布に役立てていきたいと思います。（編集部）

# ことばQ&A



**Q質問**：「十本」などの「十」の発音は、辞書には「ジッ」とありますが、「ジュウ」と発音するアナウンサーもいます。どちらが正しいのでしょうか。

**A回答**：現在刊行されている国語辞典を引いてみると、見出し項目としていずれも「ジッ」の方を主に採用しています。「常用漢字表」にも「十」の読み方として、「ジュウ」と「ジッ」はあっても「ジュウ」ではなく、語例として「十回」は「ジッカイ」を探っていることから、「十本」などの「十」の発音は、一般に「ジッポン」のように「ジッ」とするのが標準的であると言えそうです。

歴史的仮名遣いでは「じふ」と書くように、漢字音の系統からもともと「十」の字音は「ジフ」でした。「フ」を末尾に持つ字音は、サ行、タ行、カ行、パ行の音で始まる語に続いていくとき、例えは「合カフ→カッ（合戦）」「執シフ→シッ（執権）」のように促音化しました。17世紀初頭の『日本大文典』『日葡辞書』にも、当時の発音として「ジッ」に当たる発音が示されているだけで、「十本」は本来「ジッポン」であったと判断できるわけです。その一方、この「ジフ」は長音化して「ジュウ」に変化していきます。「ジュウ」が生じたのは、おそらく

く「ジフ」から長音化した「ジュウ」が、先のサ行等の音で始まる語に続いていくときに、既存の「ジッ」という発音に影響を受けて、「ジュウ」→「ジュウ」と類推してしまったと考えられます。

では、「ジュウ」は間違いかというと、平成5年のNHK言語調査では「十中八九」について「ジュウ」の支持者が61%と多いように、現在では「ジュウ」と発音する人がかなりいます。さらに、昭和41年のNHK放送用語委員会で「20世紀」の発音として「ニジッ・ニジュウ」の両様を探ること、また「十」の発音の「ジッ」「ジュウ」については、他の用例についてもすべてこの決定を準用することを決めています。放送での標準発音の集大成とされるNHK編『アクセント辞典』でも、41年版から「二十本」「五十歩百歩」など、両様の発音を平等に認めています。つまり、伝統的には「ジッ」であるというだけで、実際には年代層あるいは地域によっていろいろであり、同じ東京でも「ジッ」と発音する人も「ジュウ」と発音する人もいるというのが現状なのです。

時代とともに言葉は変化し、発音にも「ゆれ」が生じます。伝統的な規範があったとしても何を規範とするかについては多様性があると考えられます。

（小河原義朗）

## 表紙のことば

昭和23年12月20日の創立以来、国立国語研究所は何度か移転・改築を続けてきました。1年前、その旧庁舎を追ってみることになり、第1回目として、かつて分室として使用された旧山本有三邸（現・三鷹市山本有三記念館）を訪ねました（本誌第5号）。第2回目の今回は、創立当初、研究所がその一部を借用して仕事をしていた、明治神宮聖徳記念絵画館を取り上げます。

絵画館は大正時代に建てられた、鉄筋コンクリート造りの建物で、外壁と階段が花崗岩で表装されています。表紙の写真から分かるように、左右対称（向かって右が東、左が西）の造りで、上から見ると、「H」の横棒を長くした形をしています。

正面中央の階段を上ったところが主階（画室）で、明治天皇・昭憲皇太后お二人のご業績を伝える80枚の絵画が展示されています。第2次大戦中は、閉館し、壁画を地階（1階）へ格納していましたが、昭和22年12月、進駐軍による接収が解除されると、

翌23年1月に一般公開されました。現在、絵画館を訪れる人は正面の花崗岩造りの階段を利用しますが、当時は、一般の拝観者は地階東側の「公衆入口」から入り、「下足取扱所」「広間」などを通って、主階へは屋内の階段を利用していたそうです。

国語研究所は、創立当初から、昭和29年9月30日に神田一ツ橋に移転するまでの約6年間、絵画館地階の西半分を借用して仕事をしていました（現在この部分は、絵画館学園として利用されています）。

この間、仕事が進むにつれ手狭になったため、昭和26年12月からは、研究所の一部が山本有三邸や新宿区立四谷第六小学校の一部を分室として借用することになりましたが、それまでは、所長、庶務部、部長などは別として、ほぼすべての所員（定員50余名）が1つの大きな部屋の中で、研究室ごとに机を並べて、仕事をしていたそうです。

早く明治30年代には、国語問題の解決には、その前提として広範な国語の調査研究が必要であり、そのためには、適当な研究機関を設立しなくてはならぬということが、先覚によって唱えられていました。昭和23年に国語研究所が設立されたものの、当時、現代語を研究する専門家はほとんどいなかったような状況でした。

そのような中、研究所では、録音器で実際の話しことばを録音してデータとして利用したり、新聞や雑誌から用例を大量に集めて分析したり、統計の手法を取り入れたりして、さまざまな現代語研究の方法を開発しながら、研究を進めました。

また、それまで、個人で行われることの多かった日本語の研究に、総合的な共同研究という形で取り組みました。これは、創立当初から所内に「社会的目的を持った研究を行わねばならない」というが雰囲気があり、そのためには共同研究により大規模な調査研究を、と考えてのことだったようです。

石造りの絵画館は、冬の寒さが身にこたえたそうですが、その寒さに耐えていた人たちこそ、現代語研究という領域を開拓し、推進して行った、熱い人たちだったといえるのではないでしょか。

(池田理恵子)

## 新刊紹介

国立国語研究所ことばビデオ

### 【ことば探検・ことば発見】(VHS 46分)

付:『解説書』(B5判 126ページ)

小学校・中学校の児童・生徒に視聴され、「総合的な学習の時間」などに活用されることを考慮して、児童・生徒のことばへの興味と関心を喚起し、日本語の豊かさや的確な表現の魅力に気づかせることを目指しています。

#### ビデオ作品の内容・学習効果

実践編「気象科学館で調べよう」(23分)

ことばに興味と関心を持って「ことば調べ」を実践するときのモデルを提供しています。

- ☆ 課題発見のきっかけ
- ☆ 調べ方の話し合い
- ☆ 気象予報士に取材する
- ☆ 身近な大人に取材する
- ☆ 報告・発表・話し合い
- ☆ ことば探究への発展

日常の素朴な疑問をきっかけに課題を見つけ出し、探究のテーマを決めて、ことばを調べることによって、日本語の豊かさ、不思議さ、奥深さが実感できます。その過程をとおして、情報収集、話し合い、取材(インタビュー)、報告・発表など、総合的な学習に必要な言語活動を身につけることができます。

素材編「あんな日本語・こんな日本語」(23分)

「ことば調べ」にとりかかる糸口として、日本語のさまざまな側面を素材として提供しています。

- ☆ 思いやりのある日本語
- ☆ 元気のいい日本語
- ☆ 表情豊かな日本語
- ☆ 想像がふくらむ日本語

人への心くばりを表現する日本語、作業や運動をするときの威勢や活気にあふれる日本語、心情や意図を伝える表情豊かな日本語、詩的表現によって想像がふくらむ日本語など、ことばやコミュニケーションのさまざまな側面に関心を持ち、その魅力に気づくことができます。

#### 『解説書』の内容

「ビデオと解説書の活用にあたって」「シナリオ実践編・素材編」「自然科学と暮らしを結ぶことば」「話しことばコミュニケーション」「豊かな日本語」「指導の手引」「コラム」など。

#### 教育映画祭「優秀賞」受賞

第48回(2001年)教育映画祭(日本視聴覚教育協会主催・文部科学省後援)において優秀賞を受賞しました。入賞作品の発表上映・表彰式は8月28日(火)、虎ノ門ホールで行われました。

#### 中学校国語科での活用

中学校国語教育研究(全日中国研)の全国大会(徳島市・10月11/12日)言語事項分科会で、このビデオの国語科での活用が検討される予定です。

(吉岡泰夫)

## 新刊書目

### 1 国立国語研究所ことばビデオ

『ことば探検・ことば発見』(解説書付き)

国立国語研究所制作/2001年3月/実践編23分  
・素材編23分/問い合わせ先: 国立国語研究所  
総務課 tel 03-5993-7603

### 2 『教育基本語彙の基本的研究—教育語彙データベースの作成—』(国立国語研究所報告117)

国立国語研究所発行/2001年3月/明治書院/  
A4判/15,000円(税別)

### 3 日本語教育指導参考書22『日本語教育のための文法用語』

国立国語研究所編/2001年6月/財務省印刷局/  
A5判/600円(税別)

## ことばフォーラムのご案内

国立国語研究所では、市民の皆さんと一緒にことばについて考えたり、話し合ったりできる「広場」のような機会を、「ことばフォーラム」と名付けて開催しています。

### 第6回ことばフォーラム：「ことば」を調べる・考える

- ・開催日：平成13年10月27日(土)午後2時～4時
- ・開催場所：**艮陵会館記念ホール**（宮城県仙台市青葉区、会場連絡先 022-277-2721）
- ・概要：
  - ・日本語にはどうしていろいろな方言があるのか？
  - ・日本語は外国人が学ぶのが大変な言語か？
  - ・「常用漢字」「教育漢字」「人名漢字」の違いはなにか？

よくある「ことば」の質問から話題を取り上げ、3人の講師がそれぞれの専門である方言研究、国語学、日本語教育の立場から話題を繰り広げ、みなさまと一緒にことばについて考えます。

参加者の皆様からの「ことば」に関する質問コーナーもあります。

- ・講演者：小林 隆（東北大学大学院助教授）・田中 牧郎（国立国語研究所員）・小河原義朗（国立国語研究所員）
- ・構成：山田 貞雄（国立国語研究所員）

定員200名、要申し込み。国立国語研究所仙台フォーラム係宛。葉書（〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14）、ファックス（03-3906-3530）、E-mail（syamada@kokken.go.jp）で。

なお、このフォーラムは、国立国語研究所が編集する一般向けの解説書『新ことばシリーズ』との連絡を考えた試みの第二回目となります。（新ことばシリーズ13『「ことば」を調べる・考える』・同14『「ことば」に関する問答集—よくある「ことば」の質問—』は、財務省印刷局より刊行されております。）

### 第7回ことばフォーラム：日本語情報の海外提供

- ・開催日：平成13年11月1日(木) 午後4時10分～4時55分
- ・開催場所：東京国際フォーラム「データベース2001東京」展示ホールセミナー室B会場（東京都千代田区丸の内、会場連絡先 03-5221-9000（代表）URL <http://www.dbtokyo.com>）
- ・概要：インターネットが全世界的に普及してきていますが、日本語で書いてある日本的情報を入手しようとすると、多くの海外のパソコンでは日本語が表示できない困難に出会います。このフォーラムでは、このような日本語の表示ができない海外のパソコンでも、日本語の情報を高速に検索できるシステムについて、書籍出版情報の海外提供システムに関する研究を元に、わかりやすく解説します。また、国立国語研究所における情報発信への応用などにも触れます。

- ・講演者：横山 詔一（国立国語研究所員）・笹原 宏之（国立国語研究所員）・熊谷 康雄（国立国語研究所員）

エリク・ロング（国立国語研究所非常勤研究員）

- ・構成：横山 詔一（国立国語研究所員）



### 第8回ことばフォーラム：ネットワークコミュニケーションとことば（仮題）

- ＜予告＞**
- ・開催日：平成14年1月19日(土)
  - ・開催場所：立川市女性総合センター・アイムホール（東京都立川市）
  - ・概要：電子メールや携帯電話などの電子通信機器が普及・発達したことで、現代日本人の言語生活がどのように変化してきているのか、特に、コミュニケーションのありかたや意識について取り上げて考えます。
  - ・講師：（未定）

ことばフォーラムに関する問い合わせ先：国立国語研究所 総務課  
tel：03-5993-7603 URL：<http://www.kokken.go.jp/>